



タチアナ・マクファデン選手 (アメリカ) (陸上競技)

1989年、マクファデン選手はソビエト連邦(現在のロシア)のサンクトペテルブルグで生まれた。脊椎に異常がある状態で生まれたが、生後21日間は手術が受けられず、背中が裂けた状態で放置された。生みの親は彼女を育てる余裕がなく、手術後のマクファデンは児童養護施設へ送られ6年間を過ごす。外へは出られず、20名ほどが1室に寝かされ、朝はおかゆ、昼は薄いスープという厳しい生活環境だった。さらに、脚が折れ曲がっていたため、逆立ちをして腕だけで歩いていたのだ。

そんなとき、彼女に転機が訪れた…。

アメリカ政府の職員として人道支援を行っていたデボラ・マクファデンが、児童養護施設を訪れた。タチアナの瞳の輝きを見たデボラは彼女を養子にする。アメリカに移ったマクファデンは、折れ曲がった脚の手術をする。そして、より遠くに、より速く移動できる道具を手に入れた……車いすである。

移動する自由を与えられたマクファデンは、養母デボラの勧めでいろいろなスポーツを体験していった。ある日、陸上競技見学会に参加。そこで、いつも乗っている普通の車いすで初めて体験レースに参加すると、レース用車いすの子どもを抜き1位をとったのである。周囲を驚かせたマクファデンは、その5年後、年令別のレースで世界記録を出す。ソビエト時代の6年間、腕だけで歩いていたことで上半身の筋肉が非常に発達していたため、車いすを押し推進力が人並み外れて強かったのだ。

現在*、イリノイ大学で選手生活を送るマクファデン選手は、レース前になると6時間の走り込みで日に48～64kmを走る。合間には過酷な筋力トレーニングを欠かさない。そして、リオ2016パラリンピックでは、金メダル4個、銀メダル2個を獲得。また、マラソンではシカゴ、ボストン、ニューヨーク、ロンドンの4大マラソンを制覇(グランドスラム)した。

今の彼女の夢は、手術やリハビリを受ける子供のケアを行う国家資格をとってチャイルドライフ・スペシャリストになることだという。

*教材を作成した2020年2月当時の情報です。



©WOWOW



©WOWOW



©WOWOW



©WOWOW



©WOWOW

アダム・ブレイクネイコーチが語る彼女がすごい理由

100mからマラソンまでこなす。瞬発力と持久力の両方を持っている。筋肉に筋肉を重ねたような体。ラストスパートは世界一。彼女のことを「beast(野獣)」と呼んでいるよ！



「もう少しよ！わたしならできるわ！」と思うことがラストスパートの力となる。

「ヤサマ！」(ロシア語) = 「やればできる！」とは、わたしが幼い頃から信じている言葉です。



木村敬一選手 (日本)

(水泳)



©wWow



©wWow

木村選手は生まれつきの目の疾患で、2歳で全盲となる。現在は、見えていたときの記憶はないという。6歳で滋賀県立盲学校に入学。親がスキーやスケート、キャンプなどに連れて行くと、元気に走り回る少年だった。しかし、けがも多く、心配した母親は、4年生のときに安心して運動ができるように彼をスイミングスクールに入れた。ところが、半年たっても泳げない。人が泳ぐ姿を見たことがない木村少年にとって、それは当然のことであった。

12歳で単身上京し、中学に入学すると水泳部に所属。もやしのような体格でコーチからも期待されなかったが、誰よりも練習熱心で頑張り屋だった。めきめきと頭角を現した木村少年は、中学3年で国際大会に初出場で初優勝。2008年の高校2年のとき、パラリンピック北京大会に出場し5位入賞。

日本大学を卒業後、東京ガスに入社。トレーニングの日々を送り、2016年にリオ2016パラリンピックに出場し、銀と銅を合わせて4つのメダルをとる。金メダルを確実視されていた木村選手だが、金には届かなかった…。

思い悩んだ末、木村選手は、東京2020パラリンピックで金メダルをとるために「険しい道」を選択する。それは、トレーニングの拠点をアメリカに移すことだった。

ロヨラ大学水泳部ヘッドコーチ ブライアン・レフラー

目が見えない、英語が話せない、知り合いもいない。それでも、そんな場所に彼は1人で飛び込んできた。彼の金メダルへの情熱がひしひしと伝わり、ケイチに東京で金メダルをとらせることをわたし自身のゴールとしたんだ。



©wWow



©wWow

木村選手の参加するレースは、先天性と後天性の全盲選手が一緒に泳ぐ。過去4大会での金メダリストはすべて、過去には目が見えていたが病気などで視力を失った後天性全盲の選手だ。水泳のフォームを見たことのある後天性全盲の選手に対し、人が泳ぐ姿を見たことがなく、正しいフォームがイメージできない木村選手には、スタート以前でのハンディがある。それでも、前を向くしかない木村選手はアメリカでの過酷なトレーニングをスタートさせた。限界まで自分の泳ぎを追究し、徹底した体づくりを行い、弱みであったレース後半での失速を克服した。そして、2018年、アメリカでの大会(カリフォルニアクラシック)で平泳ぎ50mの世界記録を更新、さらに、横浜の大会(ジャパンパラ水泳競技大会)では、本命のバタフライ100mで自己ベスト(アジア新記録)をたたき出した。木村選手は自分が前に進んでいることを証明してみせたのだった。



Now, I am getting off the path in my life. 僕は今、道から外れているのかも。

When I cannot trust myself, I climb a mountain. 疑いが生じたとき、とにかく上に登るんだ。

Do I go through a gentle road or a steep path? 緩やかな道か、険しい道か？

The steeper the road is, the faster I can get to the top... 険しい道ほど早く頂点へと近づける…

When I get there, what kind of landscape will be waiting for me? さあ、この険しい道を登りきったら、どんな景色が目の前に広がるだろう。